

特集1 書評特集 先端社会研究所叢書『戦争が生み出す社会』



◆『引揚者の戦後』

島村恭則編 新曜社

初版第1刷発行 2013年8月15日

目次

- 序章 「引揚者の戦後」 島村恭則
- 第1章 「引揚者が生み出した社会空間と文化」 島村恭則
- 第2章 「記憶のなかの満洲引揚者家族の精神生活誌」 篠原徹
- 第3章 「恩賜財団同胞援護会と土浦引揚寮」 稲葉寿郎
- 第4章 「引き揚げた人、残された人－樺太引揚者とサハリン残留朝鮮人が残してくれたもの」 池田貴夫
- 第5章 「神々の引揚げ－北方四島から北海道へ」 舟山直治
- 第6章 「「ふるさと」へ帰れない引揚者－パラオとつながっている人びと、帰れない人びと」 李建志
- 第7章 「歌がつなぐ過去といま－パラオ引揚者の暮らしが語りかけてくるもの」 齋藤由紀
- 第8章 「戦後引揚げという〈方法〉－帰還移民研究への視座」 辻輝之
- コラム 「鳴門市ドイツ館と引揚者／塩竈の寿司屋と闇市」 島村恭則
「朝鮮群山引揚者と月明会」 藤井和子
「三方原台地の戦後開拓」 三室辰徳
「国後島から奥尻島への移住」 舟山直治

◆『引揚者の戦後』書評I

◎引揚者を帰還移民として捉えるということ

松田ヒロ子（神戸学院大学）

はじめに

2003年に発表された『「引揚げ」に関する序章』（『思想』955号）において、成田龍一は、日本帝国崩壊に伴う「引揚げ」については、それまで主に手記や小説という形式を通じて当事者の体験を追体験することにとどまり、歴史的な考察や分析が十分になされてこなかったことを指摘した（成田2003：149）。それから10年余りの間、その問題提起に応えるかのように、引揚げ事業や引揚者援護事業、そして引揚げに関連する「留用」や日本側資産の接収、引揚者団体や在外財産補償運動の実態を検討する研究などが次々と発表された。本書はこれら一連の研究に連なる著作であると同時に、極めてユニークな学術的貢献を成した研究書だといえる。

その最大の特徴は、編著者をはじめとして執筆者の多くが民俗学や文化人類学を専門とし、実地調査や聞き取り調査の手法を用いて引揚げ当事者の生活史に迫った点であろう。終戦から70年が経過しようとしている今、実際に「外地（以下、括弧を省略）」から引き揚げ、戦後日本社会を生き抜いた当事者の数は急速に減少している。そのような中で、引揚げ経験者に聞き取り調査を実施し「語り」の内容を明らかにした本書は時機を得ており、研究書としてのみならずその資料的価値からも評価されるべきだといえよう。

1. 「引揚者」とは誰のことか？

はじめに、本書がタイトルとしている「引揚者の戦後」が示唆するものについて検討したい。いうまでもなく本書の研究対象は「引揚者」であるが、それが歴史的概念なのか、それとも分析概念として用いられているのか、不明である。本書のなかで唯一理論的考察に特化した第8章において辻輝之は、倉本和子『満州の遺産－Manchurian Legacy』を引用しながら以下のように論じている。

倉本は後述する「〈引揚者〉という名称は終戦以来、旧植民地から戦後、本国送還になった私達をひと絡げにして一般の日本人から区別する固有名詞になっていた」（倉本 2003 : 251）。しかし、「引揚者」というラベルは一方的に押しつけられたものではない。歴史体験と記憶の選定、その意味づけに加えて、帰国後に居住、就業、社会保障など制度化された排除と差別が共鳴し合いながら、「人種」としての境界を再生産し続けたのは事実である。（389頁）

たしかに「引揚者」とは、日本敗戦まで外地で生活していた極めて多様な主体に与えられた総称である。「引揚者」とは、帝国日本の勢力圏下においては特権的地位にあった「支配者」だったという点においては共通していたが、そこには政治、経済、軍事の中核部にあって日本の植民地政策に大きな影響力を与えていた者も、「内地（以下、括弧を外す）」で生活に行き詰まり夜逃げ同然で移住してきた者も、植民地で生まれ育ち一度も内地に足を踏み入れたことのない者も含まれていた。また「引揚者」の送還前の居住地は広範囲にわたっており、満州国、台湾、朝鮮半島、南洋群島、東南アジアなど、それぞれ終戦時の状況も送還のあり方も違いがみられた。このように多様な主体が日本列島に上陸するにあたり、一律に「引揚者」というラベルを付与されたのだった。しかしだからといって、「引揚者」が内実のない歴史的概念だと断定することはできない。いったん概念が定着すると、それが記号として、内地で終戦を迎えた日本人との境界線を再生産するようになり、制度的な差別や排除との増幅作用を通じて、内地で終戦を迎えた日本人とは区別される「引揚者」集団を構築するようになったからである。

辻は、戦後日本の国民統合で重要な意味をもった歴史経験として内地における戦争体験を挙げ、それを共有していない引揚者が「日本」や「日本人」から排除され、二流市民あるいは準国民として包摂されたことを指摘する。そして引揚者を「帰還移民」として捉え直し、同じように「準日本人」集団として人種化された在外日系人と同じ地平で検討することの意義を論じる。本書の合評会（2014年9月15日 関西学院大学にて）に参加した松浦雄介氏や崔徳孝氏は、引揚者を「帰還移民」として一般化することによって植民地帝国の崩壊という歴史的文脈が捨棄される可能性を懸念する（崔 2014）。しかし辻は、そういった危険性を認識しつつも、とりわけ近年の南米出身日系人の「特別受入」政策を意識し、引揚げを帰還移民として捉える〈方法〉が、今日の日本の多文化共生という現代的課題に歴史的視点を提供する可能性を見出だそうとしたのではないだろうか。

辻が論じた、「引揚者」が他の日本人と区別されながらも日本社会に包摂される構造とメカニズムについては、実証研究の位相においては、「引揚者差別」の様態を分析することによって明らかにされうると思われる。実際、本書中で「引揚者差別」に言及された箇所は少なくない。例えば、編著者の島村恭則は自身の聞き書きの記録から、引揚者寮の住民が「四丁目の人間」（数字は仮名）

と呼ばれていたことや「『四丁目の人間は危険だ』と言われたり、また『泥棒部落』という言い方がされたりしたこともある（48頁）」と引用している。またパラオからの引揚者の生活史を検討した李建志も第6章において次のように述べている。

常夏の「楽園」から、いきなり寒い日本を経験していることがわかる。与えられた開拓地は「すすき野原」だったといい、ここから彼らの苦難に満ちた開拓生活が始まる。「ヒキアゲシヤ」が独特の差別を受けたのは、彼らからの聞き書きからもうかがえる。

たとえば次のようなことを、久保さんは教えてくれた。いわゆる「外地日本語」とでもいべき標準語に近い日本語をしゃべっていた彼らは、ことばが違うと「野蛮扱い」をされたという。（289-290頁）

ところが上の二人のほか他の執筆者が、引揚者とそれ以外の日本人との間の境界線を再生産した構造とメカニズムの解明を試みたとは思われない。それどころか、「引揚者差別」はただそれが当事者の口にはぼったことをもって客観的に「あった」こととされるのみで、「引揚者差別」とは一体何なのかという説明はなされない。結果としてこれらの事例研究は、辻が期待するように日本社会の包摂と排除の構造やメカニズムを明らかにすることもなく、また「『日本文化』や『日本人らしさ』を問題化する〈方法〉（393頁）」を提示しているともいい難いのである。

2. 「語り」から読み解く引揚者の戦後

ところで編著者の島村恭則は、はじめに本書の課題を「エリート層ではない一般の引揚者たちの戦後の暮らし（2頁）」を解明することと、「『内地』に引き揚げた後の引揚者の生活がいかなるものであったか、またそれは、周囲の社会や日本社会全体にとっていかなる意味をもっていたか（2頁）」問うことだとしている。実際には、後者に関する議論はあまりなされておらず、8章のうち半数が、満洲（第2章）、樺太（第4章）、パラオ（第6、7章）からの「エリート層ではない一般の引揚者たちの戦後」の生活史の検討である。第2章は著者本人が引揚者であり、自分史を語りつつその歴史的意味を論じるという特異なスタイルをとっているが、それ以外はそれぞれの著者が聞き取り調査を実施し、そこで得られた口述資料をもとに生活史を再構成している。

だがここで注意すべきなのは、著者らは「引揚者の戦後」のいったいどのような「真実」を明らかにしようとしたのかが必ずしも明確でないという点である。歴史学において口述史が取り入れられるようになった1970年代から、口述資料の信頼性については繰り返し疑問が提示されてきた。すなわち、特定の訓練を受けた者による文書記録とは異なり、一般の人びとの記憶には思い違いや思い込みがつきものである。しかもひとは、みずからの自尊心や名誉のためにあえて虚偽の証言をすることもあれば、無意識的に自分にとって都合の悪い事実について隠したり言いよんだりするのが常である。裁判とは異なり学術調査では、虚偽の証言をしても処罰されることはなく、調査者はあくまで本人の良心に信頼することしかできない。このような限界があるなかで、口述資料は一体いかなる「真実」を明らかにしようのかが問いただされてきた（Ritchie 2010; Thomson 2010）。

そうした批判に対して口述史の擁護者たちは、口述資料の信頼性は文書史料のそれとは異なる視

点から評価されるべきものであり、また文書史料にはない資料的価値があることを主張してきた。口述資料は、特定の出来事がいつどのようにして起こったのかといった事実を明らかにするという点においては、文書史料と比較して信頼に足らないかもしれない。だが、特定の歴史的事件に関わった人びとの個人的動機や想像力、あるいはそれに巻き込まれた人びとにとっての事件の個人的な意味やその後の人生へのインパクトなどを解明するという点においては、当事者による口述資料は、行政文書や専門家による文書記録とは比較にならないほど価値のある、信頼性の高い資料だといえるのである (Alessandro 1998)。

こうした方法論的な議論を経て、いまや口述資料の学術的価値を全否定する研究者が少数派となる一方で、方法論的自覚なしに口述資料を用いる研究も少なくなっている。だが本書では、そのような方法論的な省察はほとんど見当たらず、引揚げ当事者の「語り」があたかも客観的な引揚者の生活実態を写し取っているかのような記述が散見される。しかしながら、本書の各著者らが聞き取り調査を通じて明らかにしたかったのは、引揚者が「何をしたのか」という客観的な事実だったのだろうか。むしろより丁寧に検討されるべきだったのは、引揚者が何を語るに足る事実として選択し、いかに語っているのか、また語ることを通じて、それぞれの当事者はいかに「引揚者」という主体を言説的に構築しているのか、という点だったのではないだろうか。そしてそのような分析がまさに、第8章で辻が論じているとおり「『引揚げ』というラベルが『固有名詞』化したのは、『等価』だが『異なる』歴史体験、記憶の提示、帰国前の生活様式の再生産といった『抵抗』による意図せざる協働 (co-authorship) の結果である (389 頁)」ことを提示しえたのではないだろうか。

3. 戦争が生み出す社会？

辻は、引揚者を「帰還移民」として捉えることを提唱した上で、1980年代以降の帰還移民研究において多くの専門家が共有している認識や方向性を以下のように整理している。

(1) 帰還に至る意思決定と、帰還後の再定住など一連のプロセスにおける移民の行為主体性を考慮することが不可欠である、(2) 移民の行為主体性と構造的要因が相対的、相補的に創り出す「文脈 (immigration contexts)」と、そこで展開する「帰還をめぐる政治 (The Politics of Return)」(Kubat 1984) への眼差しが必要であるなどの主張がなされ、(3) 移民を移住元から移住先、帰還移民を移住先から「本国」への、それぞれ一方的かつ不可逆な移動とする枠組みを越え、移民、帰還移民を連続性があり、常に進行するプロセスの一構成としてとらえ直すことが望ましいという認識が共有され、transient migration, shuttle migration, circular migration, oscillating migration, exchange migration など、既出概念の妥当性や適用性と新しい用語の導入が検討された (Richmond 1984; Rogers 1984)。(378-379 頁)

前述したように、引揚げを帰還移民として捉えることに対しては批判も多い。にもかかわらず私は、帰還移民研究の視点と方法が引揚げ研究に資する部分も多いと考える。特に上に示されているように、移民を常に進行するプロセスとして捉える視点は、これまでの日本の引揚者研究に対して示唆的である。また、引揚げを帰還移民として捉えることが歴史的な文脈を捨象する可能性が懸念さ

れているが、今日の帰還移民研究においては移動を生み出す構造的要因や文脈、「帰還をめぐる政治」を考慮することは研究者の間での共通認識となっている。引揚者を帰還移民として捉えることは、おのずと、一般の人びとを「移民」から「支配者」へ、そして「引揚者」へと変容させる政治、経済構造要因にも目を向けることになろう。

ひるがえって、本書は「引揚者の戦後」に焦点を当てているのだが、帰還移民研究の視点は、「戦前」と「戦後」という日本史の枠組みにとらわれることなく、個人が満洲や樺太、北方四島やパラオに移り住み、日本の敗戦を機に日本列島に再定住したプロセスを連続的に捉えることを促すのである。それはまた、帰還移民として捉える『引揚者の戦後』をテーマとする本書が、「戦争が生み出す社会」というテーマそのものを内破する可能性を秘めていたということではないだろうか。

すなわち、「引揚者」とは「戦争以前」に目を向けることなしには理解できない存在である。『引揚者の戦後』というテーマが示唆するのは、日本の「戦後」が植民地帝国日本の影を背負い続けていたことにはかならない。そして、それを問題提起することが「戦争が生み出す社会」シリーズの一卷としての本書の最大の意義であり、本書はそれが全体としてどの程度まで成功しているのかという部分において評価されるべきであろう。

参考文献

- Alessandro, Portelli, 1998, "What Makes Oral History Different," Robert Perks and Alistair Thomson eds., *The Oral History Reader*, London and New York: Routledge, 63–74.
- 崔徳孝, 2014, 「参加報告：シンポジウム『戦争が生み出す社会——関西学院大学先端社会研究所叢書『戦争が生み出す社会』を手がかりとして』」科学研究費補助金・基盤研究 A 「20 世紀東アジアをめぐる人の移動と社会統合に関する総合的研究」（代表：蘭信三）ホームページ, (2014 年 11 月 16 日取得, <http://dept.sophia.ac.jp/pj/asianmigration/>).
- 成田龍一, 2003, 「『引揚げ』に関する序章」『思想』955: 149–174.
- Ritchie, Donald A., 2010, "Introduction: The Evolution of Oral History," Donald A. Ritchie ed., *The Oxford Handbook of Oral History*, Oxford: Oxford University Press, 3–19.
- Thomson, Alistair, 2010, "Memory and Remembering in Oral History," Donald A. Ritchie ed., *The Oxford Handbook of Oral History*, Oxford: Oxford University Press, 77–95.
-